PRESS RELEASE

岡山大学
OKAYAMA UNIVERSITY

平成 30 年 10 月 25 日

日本国内のかぜ患者への抗菌薬処方状況を初めて解明

◆発表のポイント

・2013～2015 年の 3 年間にわたる全国規模の観察研究でかぜ（急性気道感染症）診療における抗菌薬治療の詳細を明らかにしました。
・かぜに対する日本の抗菌薬選択は諸先進国と比べて異なることが明らかになりました。
・本研究成果が薬剤耐性菌の出現抑止の取り組みに活用されることにより、国内外における保健関連の SDGs への貢献が期待されます。

世界的に多剤耐性菌の増加が懸念される中、岡山大学大学院ヘルスシステム統合科学研究科の狩野光伸教授・大学院医歯薬学総合研究科（薬）の小山敏広助教らの研究グループは、岡山大学病院の千堂年昭教授、北村佳久准教授、建部泰尚氏、田坂健氏、札幌医科大学の樋之津史郎教授、徳島大学病院の座間味義人准教授、大阪大学の萩谷英大助教、千葉大学病院の三上奈緒子氏との共同研究によって、日本国内のかぜ（急性気道感染症）に対する抗菌薬の処方状況の詳細を初めて明らかにしました。本研究成果は、2018 年 9 月 29 日付の英国の医学誌「*Family Practice*」誌に掲載されました。

2013～2015 年の全国規模の診療レセプトデータによると、わが国では、かぜに対し、国内外の臨床ガイドラインが推奨するペニシリンの処方率が欧米と比較すると低い一方で、広域抗菌薬の割合は高いことが明らかになりました。広域抗菌薬の過剰投与は薬剤耐性菌出現の原因となります。本研究の成果により、実態を踏まえた抗菌薬の適正使用推進を通じ、持続可能な開発目標（SDGs）の達成への貢献も期待されます。

◆研究者からのひとこと

今回の研究は 6 大学・大学病院の研究者による、医療ビッグデータを活用した、SDGs へ貢献しうる共同研究です。抗菌薬への耐性を持つ薬剤耐性菌の出現は国際的な脅威です。しかし、さまざまな研究者の視点を取り入れ、新しい医療ビッグデータを活用することで、日本だけでなく世界の人々に貢献することができると期待しています。

小山助教

■発表内容

＜現状＞

かぜや感冒などと一般的にいわれる急性気道感染症（急性上気道感染症および急性下気道感染症を含む）は、その多くがウイルスによるもので抗菌薬は有効ではありません。一方、重症の細菌感染症には抗菌薬による治療が有効です。この抗菌薬による治療は、さまざまな臨床研究などの研究成果を踏まえた臨床ガイドラインを参考にして進められています。米国や欧州、日本においても急性気道感染症の治療に関する臨床ガイドラインが策定され、有効性が認められている抗菌薬とその使用に際しての優先度などが定められています。臨床ガイドラインの活用は治療の質向上に加え、適正な使用を推進することで、薬剤耐性菌の出現を遅らせることにもつながるとされています。諸先進国では、医療の質の担保と薬剤耐性菌の出現抑制のために、これらの臨床ガイドラインに即して日常診療が行われているかどうかを詳細に把握するための学術研究が盛んに実施されています。しかしながら、これまでに日本における急性気道感染症に対する抗菌薬の使用状況について大規模に調査した研究はありませんでした。したがって、本研究は急性気道感染症の治療に選ばれる抗菌薬について明らかにすることを目的して実施しました。

＜研究成果の内容＞

本研究は 2013～2015 年の間の、急性気道感染症に対して処方された総計 460 万回以上の抗菌薬を分析対象としました。最も高い割合で処方された抗菌薬は、セファロスポリン系抗菌薬（41.9%）、次いでマクロライド系（32.8%）、フルオロキノロン系 （14.7%）でした。セファロスポリン系の中で、第 1 世代、第 2 世代、第 3 世代はそれぞれ、1.0%、1.7%、97.3%を占め、セファロスポリン系抗菌薬のほとんどが第 3 世代セファロスポリンであることが明らかになりました。一方、急性気道感染症の多くに対して、第一に使用が検討されるべき第 1 選択薬のペニシリン系抗菌薬は全体の 8.0%であり、諸先進国の状況と異なることが明らかになりました。

＜社会的な意義＞

医療ビッグデータを詳細に分析した結果、急性気道感染症に対する抗菌薬の選択は諸外国や臨床ガイドラインと異なる状況であることが示されました。このように医療の現状を詳細に分析し、理解することは今後の医療の質向上と薬剤耐性菌に対する取り組みに貢献することが期待されます。薬剤耐性菌に対する国際的な取り組みにおいて日本が主導的な役割を果たしていく中で、本研究成果のような学術研究の推進が今後一層重要性を増すものと考えられます。

■論文情報

論 文 名：Pattern of antibiotic prescriptions for outpatients with acute respiratory tract infections in Japan, 2013–15: a retrospective observational study

掲 載 紙：*Family Practice*

著　　者：Yusuke Teratani, Hideharu Hagiya, Toshihiro Koyama, Mayu Adachi, Ayako Ohshima, Yoshito Zamami, Hiroyoshi Y. Tanaka, Yasuhisa Tatebe, Ken Tasaka, Naoko Mikami,

Kazuaki Shinomiya, Yoshihisa Kitamura, Mitsunobu R. Kano, Shiro Hinotsu, Toshiaki Sendo

D　O　I：10.1093/fampra/cmy094

U　R　L：https://academic.oup.com/fampra/advance-article/doi/10.1093/fampra/cmy094/5111792

＜お問い合わせ＞
岡山大学大学院ヘルスシステム統合科学研究科
教授　狩野光伸
（メール）mitkano@okayama-u.ac.jp
岡山大学大学院医歯薬学総合研究科（薬）
助教　小山敏広
（電話番号）086-235-6585
（メール）koyam-t@cc.okayama-u.ac.jp

岡山大学は、国連の「持続可能な開発目標（SDGs）」を支援しています。